

Title	詩歌における「月」の感傷的イメージの成立：「望月思郷」を中心に
Sub Title	A sentimental view of the Moon in Chinese poetry : Moon and birthplace
Author	許, 曼麗(Hsu, Man-Li)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.223- 243
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0223">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0223</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 詩歌における「月」の感傷的イメージの成立

——「望月思郷」を中心に——

許 曼 麗

## 前 言

「楊柳識別愁、千條萬條絲」と、孟東野が「古離別」に言う楊柳には数え切れないほどの絲がある。その依々たる絲の多いさまはまさに別離を目前とする人々の「萬般心思」の照り映しであろう。楊柳が別れの歌に大切な役割を果たしていることはすでに論じた<sup>①</sup>が、その他にも楊柳と同様に別離の詩作によく登場し、欠けてはならない大切な素材がある。

### 別詩 齊 張融

白雲山上盡

清風松下歇

欲識離人悲 離人の悲を識らんと欲せば

孤臺見明月 孤臺に明月を見よ

それは「月」である。別離をテーマとする詩作を考える際、素通り出来ない素材の一つである。

中国には数々の「月」に関する詩歌がある。詩歌の素材として、月は最も大衆性を持っているものの一つであると考  
えられる。

金陵城西樓月下吟 李白

金陵夜寂涼風發 金陵夜寂として涼風發し

獨上高樓望吳越 獨り高樓に上り吳越を望む

白雲映水搖空城 白雲水に映じ空城を揺がし

白露垂珠滴秋月 白露珠に垂れて秋月より滴らす

月下沈吟久不歸 月下沈吟久しく歸らず

古來相接眼中稀 古來相接し眼中稀なり

解道澄江淨如練 解道す澄江淨きこと練の如しと

令人長憶謝玄暉 人をして長へに謝玄暉を憶はしむ

月夜 杜甫

今夜鄜州月 今夜 鄜州ふしゅうの月

閨中只獨看 閨中 只だ獨り看ん

遙憐小兒女 遙かに憐れむ 小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶うを解せざるを

香霧雲鬢濕 香霧 雲鬢うんかん濕い

清輝玉臂寒 清輝 玉臂寒からん

何時倚虛幌 何れの時か虚幌に倚り

雙照淚痕乾 双び照らされて涙痕乾かん

望月懷遠 張九齡

海上生明月 海上 明月生じ

天涯共此時 天涯 此の時を共にす

情人怨遙夜 情人 遙夜を怨み

竟夕起相思 竟夕 起きて相思ふ

月を見て、物思いに耽けり、そして、触発されて、何かを歌う。このような情景は、中国人の誰もが共感出来るものであると思われる。月を眺め、故里を思い出しては悲しみに沈むこともあれば、家族や友人を懐しむこともある。またあるときは、古の人を偲んでは思いを歌に寄す。そして、自分の心境を古人に托す。中国の「月」の詩は、このような形式で扱われるものが多いので、どれも哀愁の情に充ち溢れている。その哀愁の出所のほとんどは「望郷」である。

牀前明月光 牀前明月の光り

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと

舉頭望山月 頭を擧げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

李白は「静夜思」の短い二十文字を通して、遊子望郷の情をうまく月に投影し、千古の絶唱となったのである。

このような「望月思郷」という心情は、むしろ現代中国人も古の人と同じように持っている。中国人ばかりでなく、日本人も同様に、古い時代から月をこよなく愛し、月を眺めては様々な思いを喚起させられたのである。勅撰和歌集の中に、叙景歌あるいは抒情歌として、いずれも膨大な量が採り上げられていることは、その事実を物語っている。

あまの原ふりさけみれば 春日なる三笠山にいてし月かも

安倍仲磨の「もろこしにて月をみてよみける」と題して、古今集に収められているこの一首も、李白の「静夜思」と同じ心情を詠っていると思われる。このように、月に対して、中国も日本も、ともに似たような感情を抱いているのだが、西洋では必ずしも同じような感情を湧きたたせるとは言えないようである。例えば、「遊子望郷」の情など、西洋人も当然このような情それ自体は持っているのだが、それを月と結びつけて詩に詠みこむことはあまりないようである。思うに、各民族にはそれぞれ独自の月に関する信仰、或いは神話や伝説がある。そのようなものを語り伝えていく過程のうち、一種独特の月に対する感情が形成されると思われる。そして、その感情を詩歌に詠みこみ、文学作品として、後代に伝える。後代の人がそれを学習することによって、月に対するイメージを自分の中に確固たるものにしていくことになる。つまり、一種の感情の学習とも言うべき手続きによって、各民族の月に対する心情が出来あがるわけなのである。

さて、この中国的「望月思郷」という感情だが、一体、いつ頃に出来たものだろうか。月と望郷とはどう結びついた

のдарうか。その感情の学習過程を辿ることは出来ないものであるうか。それを解明するには、やはり、まず月に対する信仰、或いは神話や伝説などが、どのように詩歌に反映されているのかという観点から推論していくしかないと思われる。

一

月は古く詩経の時代からしばしば詩に登場する。詩経の月の詩を追っていくと、その大半が一月、二月など曆の上の月と、時間の流れを表す歳月の月であることがわかる。これに対して天体としての月をさすものはわずかに六首とすくない。しかし、その中の三首は大切な意味を含んでいる。

月出

陳風

月出皎兮

月いでてさやかなり

佼人僚兮

よきひとのうるわしさよ

舒窈糾兮

たおやかな姿よ

勞心悄悄

言もなく心いたみぬ

月出皓兮

月いでて冴えたり

佼人鬯兮

よきひとのうるわしさよ

舒優受兮

たおやかな姿よ

勞心慄兮

胸さわぎ心いたみぬ

月出照兮  
倭人療兮  
舒天紹兮  
勞心慘兮  
月いでて照れり  
よきひとのうるわしさよ  
たおやかなの姿よ  
うれたくも心いたみぬ

漸漸之石  
小雅魚藻之什

へ上 略

漸漸之石  
維其卒矣  
山川悠遠  
曷其沒矣  
武人東征  
不皇出矣  
けわしき巖  
おお それ 翠し  
山川はるかに  
いつの日か尽きむ  
もののふの東にゆきて  
この山路出でむ暇なき

有豕白蹄  
烝涉波矣  
月離于畢  
俾滂沱矣  
武人東征  
不皇他矣  
豕あり 蹄白く  
川波をすすみて渉る  
月みれば畢にかかりぬ  
またしても雨しげからむ  
もののふの東にゆきて  
なにごとの暇だになき

天保<sup>てんぽう</sup>

小雅鹿鳴之什

如月之恆

月のみちゆく如く

如日之升

日の昇るがごとく

如南山之壽

南山のいのち永きがごとく

不驀不崩

かげず崩れず

如松柏之茂

松柏の茂るがごとく

無不爾或承

子孫<sup>みすえ</sup>いやつぎつぎに継ぎゆきまさむ

(右三首 目加田誠訳 龍溪書舎)

「月離于畢」という表現は「月と水」に関する信仰に基いており、「天保」と「月出」の二首の背後には「月と不死」という信仰が伺える。月と水との関係は、はやい時期から古代人の注意を引いた。雲霧霞靄などが月にかかり、それによつて、月の色が変わる。その微妙なる色の変化が雨をもたらすか否か、或いは降雨量の大小を左右する。古代人は月が水や湿気を支配すると信じていた。従つて、水と関係ある産物もまた月の盈虚によつて支配されると古代人は考えたのである。『淮南子』の「天文訓」に

積陰之寒氣爲水、水氣之精者爲月。

(積陰の寒氣は水と爲り、水氣の精なる者は月と爲る。)

月者陰之宗也。是以月虚而魚腦減、月死而羸虵瞧。

(月は陰の宗主、そこで月が虧けると、(陰性である)魚の(脳はらわた)が減り、虧けはてると羸虵(はまくり)の肉がやせる。)

楠山春樹訳、明治書院



とある。また「墜形訓」にも

蛤蟬珠龜與月盛衰

(蛤、蟬、珠、龜は月と與に盛衰す。)

と言っている。これらはすべて「月と水」という信仰を示していると思われる。詩経「漸漸之石」に出る「月離于畢、俾滂沱矣」(月が畢星の座にかかっているので、きつと大雨が降るだろう)もまさにこういう信仰の一斑を示すものと言えよう。

また、古代人は月の盈虚を月の生死そのものだと思っていたのである。

釋名、釋天、朔、蘇也。月、死、復、蘇、生、也。

月が欠けていくのは、月が死んでいくことであって、これが再び満ちてくることは、生命の復活だと考え、そこから月は永遠の生命を持つものであると信じたのであろう。自然科学の法則を発見する前において、人間の力の及ばないことは、何もかも神秘的に見えてしまい、それは神の仕業だと考えた古代人にとって、月の生命力は、文字通り驚異的であったに違いあるまい。しかも、古代人は現代人に較べれば、より限られた平均寿命しか持たないのだからなおさら、皎皎と照らす月を眺め、その光りを浴びることによって、寿命が延びるのではないかと考えたと思われる。一種の感染呪術なのである。

古の人は、ただ漫然と無意味に月を眺めたのではない。「月をみる」ことが、一つの大事な行事であったと考えられる。

釋名、釋天、望、月滿之名也。月大十六日、小十五日、日在東月在西、遙相望也。

望は「みる」、「ながめる」などの意味を持つ以外、祭の名でもある。『廣雅』の「釋天」に「望、祭也」とある。満月の日の「望」と、祭る、みる、ながめるの「望」とが同一であることは単なる偶然とは思えない<sup>(3)</sup>。やはり、満月の日とみる、ということは、深い関連があつたに違いない。陳風の「月出」などはそのような行事によって出来た歌であると思う。陳とは楚の国の近くにある国で、山や川のまつりの盛んなところであつて、歌垣が多く行なわれ、詩経に残された十首ばかりの歌もほとんど歌垣によるものと考えられる<sup>(4)</sup>。「月出」は月に關する行事、しかも夜に行われた歌垣によるものと考えられる。歌垣によるものだから、個人の感情よりも集団の感情表現と言えよう。月の下で舞いをする美女は巫女であつて、「勞心悄兮」「勞心慄兮」「勞心慘兮」と歌っている方が村の青年達であろう。舞いをする巫女の手に触れることが出来ないのを歎くあたりに、一抹の哀愁が感じられないでもないが、全体的には一個人が恋人のことで思い悩む、沈みがちな調子というよりもむしろ、村の青年達のどちらかと言うと、明るいイメージの共同意識なし共感が底流している。この歌は、のちの月の詩に大きな影響を与えたとつとに指摘されている<sup>(4)</sup>。「皎」「皓」「照」という言葉が月を形容するときの常套表現となり、月の詩に哀愁がこもるのもこのあたりから始まるという。確かに、詩作表現の上では、この詩に負うところが多い。しかし、月を借りて、悲しみ愛いを歌うのちの詩作には、詩経のこの「月出」には見出せない感情があると思われる。この詩が持つ最も大切な意味はやはり月に対する信仰、およびそれをめぐる行事の一斑を覗かせてくれたところにあるということである。のちの世に至り、「拜新月」<sup>(5)</sup>という風習と、「姮娥奔月」という伝説とを生み出したのも、そのもとはこの「月と不死」という信仰なのである。月が何となく悲しげに見えるのは、このような伝説、風習が生まれたからこそ出来たものであると言えよう。『楚辭』の「天問篇」に

夜光何徳 夜光は何の徳あつて

死則又育 死すれば則ち又育す

厥利維何 厥の利は維れ何ぞ

而顧兔在腹 而して顧兔 腹に在る

と言っている。「涉江篇」には「與日月兮齊光」（日月と光をひとしくしよう）とある。「再生」「永遠」と歌っているところから見ると、やはり、『楚辞』の時代には月に対するイメージが、まだこの「月と不死」から脱皮していないように思える。

『楚辞』の月の用例は、極めて少ない。右にあげたもの以外に、「被<sub>レ</sub>明月<sub>ニ</sub>佩<sub>レ</sub>寶璐<sub>ニ</sub>」(6)という表現がある。およそ感情らしいものを引き起こす要素が皆無に近いと言っている。屈原は君主への忠誠を叫びつつ、不遇を歎き悲しんだのだが、しかし、明月を自分の報われぬ忠誠心の比喻としては使わなかったのである。従つて、月が望郷、哀愁の心情を表す素材として使われ始めた時代について、『楚辞』の時代よりは下ると考えなければならない。しかしながら、楚辞が後世の詩人に与えた影響は極めて大きい。朝廷に対する忠誠心が空回りしたところから来る憤り、悲しみを綴つた楚辞の精神は、やがて、後世の詩人が不遇に会つたときの感情表現の拠り所となつたことはいまさら言及するまでもない。

これとは別に、注目すべきところがある。それは、一個人の感情として、「遊子望郷」の情が楚辞に現れたということなのである。「招魂篇」の最後の段に、このように言っている。

目極千里兮 千里のはてを眺めやり  
傷 春 心 春の心を傷ませる  
魂兮归来 ああ魂よ都に帰りたまえ  
哀 江 南 江南は哀しいものを

(目加田誠訳 龍溪書舎)

「魂を招く」と詠んでいるが、その根底は望郷にある。詩経にも故郷を懐しむ詩があるのだが、知識人が不遇に会い、故郷を離れた断腸の思いを「望郷」の形によって訴えるものとして、この「招魂」が先駆をなすと言えよう。

## 二

「望郷」という言葉は、『礼記』の「奔喪」に見ることが出来る。

齊衰望郷而哭、大功望門而哭、小功至門而哭、緦麻即位而哭。

(齊衰には郷を望みて哭す、大功には門を望みて哭す、小功には門に至りて哭す、緦麻には位に即きて哭す。)

齊衰、大功、小功、緦麻とは、喪服五等の名であって、死者との親疏関係を表している。この文は、奔喪の時、哭する場所を規定している内容のものである。したがって、この望郷は、文字通り、郷の方向を見るところという意味を持ちながら、「遊子望郷」の悲しみとは無関係である。

「遊子望郷」の情に関する最初の記載は、『史記』の「高祖本紀」にある。高祖が天下を得てから数年経って、始めて故郷へ帰ったとき、彼の有名な「大風歌」を歌い、舞いをしたのち、泪して、沛の父兄に語ったところなのである。

高祖乃起舞、慷慨傷懷、泣數行下。謂沛父兄曰、游子悲故鄉。吾雖都關中、萬歲後吾魂魄猶樂思沛。〔下略〕  
〔高祖乃ら起ちて舞ふ。慷慨して懷を傷ましめ、泣數行下る。沛の父兄に謂ひて曰く、游子は故郷を悲しむ。吾、関中に都すと雖も、萬歳の後、吾が魂魄は猶ほ沛を樂思せん。〕

しかし、月の顔はまだ靨ないていない。月を素材にして遊子の情を詠んだ詩作と言うと、やはり、古詩十九首の一つ、「明月何皎皎」を思い出すのである。

明月何皎皎	明月 何ぞ皎皎たる
照我羅床幃	我が羅 <small>うすもの</small> の床幃を照らす
憂愁不能寐	憂愁して寐ぬる能はず
攬衣起徘徊	衣を攬りて起きて徘徊す
客行雖云樂	客行は樂しと云ふと雖も
不如早旋歸	早く旋歸するには如かず
出戸獨彷徨	戸を出でて獨り彷徨するも
愁思當告誰	愁思 當誰にか告げん
引領還入房	領を引して還りて房に入れば
淚下沾裳衣	淚は下りて裳衣を沾す

〔花房英樹「文選」詩騷編 集英社〕

この詩に出る「我」について、「征夫」と「思婦」と二通りの解釈がある。いずれの解釈とも成立するが、遊子が故郷を思うという詩であるにせよ、遠く行っている夫を思う詩であるにせよ、この中に流れている哀愁は同質のものと言えらる。この詩には「望郷」という言葉こそないが、故里を思う情が十二分に醸し出されている。古詩十九首と同じように

詠人不知の樂府にも似たような表現がある。

傷歌行

昭昭素明月 昭昭たる素明の月  
輝光燭我牀 輝光我が牀を燭らす  
憂人不能寐 憂人寐ぬる能はず  
耿耿夜何長 耿耿として夜何ぞ長き

〈下略〉

そして、蘇武の作とされるものに下記のようなものがある。

燭燭晨明月	燭燭たり	晨明の月
馥馥我蘭芳	馥馥たり	我が蘭の芳 <small>かきり</small>
芬馨良夜發	芬馨	良夜に發り
隨風聞我堂	風の隨つて	我が堂 <small>か</small> に聞る
征夫懷遠路	征夫	遠路を懷 <small>か</small> ひ
遊子戀故鄉	遊子	故郷を戀 <small>か</small> ふ
寒冬十二月	寒冬	十二月
晨起踐嚴霜	晨 <small>あした</small> に起ちて	嚴霜を踐 <small>か</small> む
俯觀江漢流	俯して	江漢の流るるを觀
仰視浮雲翔	仰いで	浮雲 <small>かき</small> の翔るを視る

良友遠離別

良友も遠く離別すれば

各在天一方

各天の一方に在り

山海隔中州

山海は中州を隔て

相去悠且長

相去ること悠かにして且つ長し

嘉會難兩遇

嘉會一兩たび遇ひ難し

權樂殊未央

權樂殊に未だ央きず

願君崇令德

願はくは君令徳を崇くし

隨時愛景光

時に随つて景光を愛せよ

月と哀情との距離は、限りなく近いものになったのである。傍点の箇所が示している対句と類似した表現がのち、魏文帝の詩にも見られる。

漫漫秋夜長

漫漫として 秋夜 長く

烈烈北風涼

烈烈として 北風 涼し

展轉不能寐

展轉として寐ぬる能はず

披衣起彷徨

衣を披て起ちて彷徨す

彷徨忽已久

彷徨すること忽ち已に久しく

白露沾我裳

白露 我が裳を沾しぬ

俯視清水波

俯しては清水の波を視

仰看明月光

仰いでは明月の光を見る

天漢廻西流

天漢 廻りて西に流れ

三五正從横

草蟲鳴何悲

孤鷹獨南翔

鬱鬱多悲思

緜緜思故鄉

願飛安得翼

欲濟河無梁

向風長歎息

斷絕我中腸

三五 正に從横たり

草蟲 鳴くこと何ぞ悲しき

孤鷹 獨り南に翔る

鬱鬱として悲思多く

緜緜として故郷を思ふ

飛ばんことを願ふも安にか翼を得ん

濟らんと欲するも河に梁無し

風に向かつて長く歎息し

我が中腸を斷絶せんとす

(右二首 花房英樹「文選」詩騷編 集英社)

傍点の所に鑑みると、このあたりが李白の「擧頭望山月、低頭思故郷」の原型であるように思える。もっとも、李白の「靜夜思」は、のちの六朝の民歌「秋風入窗裡、羅帳起飄颺、仰頭看明月、寄情千里光」(秋風、窗裡に入る羅帳起りて飄颺す。頭を仰がしめて明月を看、情を寄す、千里の光)に基いていると言われているが(8)、魏の文帝のこの詩が李白に与えた刺激は、無視出来ないと思うのである。「望郷の情」を月に象徴化する表現は、この時代になって、ほぼ定着したと思われる。詩経の西周時代から後漢末年、千年以上の歳月が流れたのである。

長い歳月を経て、月が望郷の情を搔き立てる素材となったが、月はどうして、このように遊子の心に反響するのだろうか。その理由については、もちろん不明な所が多いのであるが、やはり古代人が持つ月に対する信仰が大切な意味を示唆しているように思える。古代では、共同体にとって、大事な祀りである「月をみる」という行事が、時代が下るに



連れ、原始的な意味をしだいに失っていく。しかし、人間はたとえ月を眺めても、寿命なんぞ延びやしないと悟りついても、なおも月を祭り、眺めていたのである。『周禮』、「宗伯禮官之職」の「典瑞」の段に

王晉大圭、執鎮圭、纁藉五采五就以朝日。

(王晉大圭、鎮圭を執り、纁藉五采五就以て日を朝る。)

とがある。その「朝日」について、鄭玄が註して曰く、「天子常春分朝日、秋分夕月」(天子、常に春分に日を朝り、秋分に月を夕る)、「月を祭る」習慣を語る記載である。他方、月の神話も月をみる習慣とともに、語り継がれて来たのである。

張衡、靈憲篇曰、羿請不死之藥于西王母。姮娥竊之(中略)。姮娥遂託身于月、是為蟾蜍。

(羿、不死の藥を西王母に請ひしに、姮娥、これを竊む。(中略)姮娥、遂いに身を月に託し、是、蟾蜍と為る。)

『淮南子』の「覽冥訓」にも「羿請不死之藥於西王母姮娥竊以奔月」とある。しかし、ここでは姮娥が蟾蜍になったとは言っていない。

姮娥盜食之、得仙、奔入月中為月精。

(姮娥之を盗みて食して仙を得、月の中に奔り入りて月精と為る。)

と注が施されている。伝承が時代を重ねていくうちに、姮娥の姿も変っていく。また月の住民も時代とともに増えて来た。

段成式西陽雜俎曰、舊言月中有桂、有蟾蜍、故異書言月桂高五百丈、下有二人常斫之、樹創隨合。人姓吳名

剛、西河人、學仙有過、謫令伐樹。

不老不死の身を持つことが出来たと言っても共に住むのは寂寞だけである。来る日も来る日も桂の木を伐って、だがその結果は空しさのみである。このような物語を持っている月は自ずと哀愁の顔を持つようになってしまふ。

時代が下り、祭月の意味がすこしずつ薄れていくこととは逆に、物語の内容は膨む一方である。月を祭るよりも、月を賞る(9)ようになってくるのである。そして、祭月、賞月が習慣化されていくと同時に、中国の社会も変動を見せ始めた。春秋、戦国時代から、秦、漢へと、中国の社会は地方分権の国家から中央集権の国家へと変貌していくのである。中国の文人達は、曾てない移動を余儀なくさせられてしまふ。郷里を離れ、中央に出て、出世の道を求める人もいれば、中央から地方へ流れる人も少なくない。文人達は、異郷での暮しを歎げかわしく思ったのであろう。そして、月を眺めては、孤独さと悲しみとがこみあげて来よう。特に満月の夜になると、その悲しみは一層掻き立てられるのであろう。

帝京景物略曰、八月十五日祭月、其祭果餅必圓。(中略)家設月光位於月所出方、向月供而拜、則焚月光紙、撤所供、散家之人必遍。月餅月果、戚屬餽相報。餅有徑二尺者。女歸寧、是日必返其夫家、曰團圓節也。

(帝京景物略に曰く、八月十五日に月を祭り、其祭る果餅は、必ず圓なり。(中略)家、月光位を月の出でし所の方に設け、月に向いて供え拜す。則ち月光紙を焚き、供えし所を撤す。散家の人必ず遍し。月餅月果、戚屬餽りて相報ゆ。餅に徑二尺なる者有り。女歸寧せるも是の日、必ずその夫家に返る。團圓節と曰ふなり。)

また、『燕京歲時記』にも「月餅」の所で、次のように言っている。

大者尺餘、上繪月宮蟾兔之形。有祭畢而食者、有留至除夕而食者、謂之團圓餅。

(大なる者尺余、上に月宮蟾兔の形を絵く。祭り畢りて食する者有り、留りて除夕に至り食する者有り。これを團圓餅と謂ふ。)

團圓餅や團圓節の團も圓も、満月みたいにまるい意味を示す所からもわかるように、満月と家族団欒とは密接した関係がある。時代が下れば下るほど、節句にあやかつて、食べ物や飾り物などが多様化されていくのであるが、そのものは、やはり家族の団欒を祝するところにあると思われる。離ればなれとなつている家族が多かつたからこそ、一堂に集まる團圓節という節句が出来るわけなのである。月とは、家族と一緒に眺めるべきものではないのか。家族と離れるこの孤独、誰ぞ知る人やあらむ。あるとすれば、あの月に住む姮娥ぐらいのものだろうと、思わず月に哀しみを託してしまふ。もちろん、かつて自分と一緒に月を眺めた家族への氣遣いは言うまでもない。

自河南經亂、關内阻飢、兄弟離散各在一處、因望月有感、聊書所懷 白居易

時難年荒世業空 時難に年荒れて世業空し

弟兄羈旅各西東 弟兄羈旅して各西東す

田園寥落干戈後 田園寥落たり干戈の後

骨肉流離道路中 骨肉流離する道路の中

甲影分為千里鴈 影を弔し分れて千里の鴈と為り

辭根散作九秋蓬 根を辭し散じて九秋の蓬と作る

共看明月應垂淚 共に明月を見て應に涙を垂るべし

一夜鄉心五處同 一夜郷心五處同じ

家族同士の心と心、そしてその心と故郷とは明月によって結ばれたのである。



覚える。そして、小学校に入ってから、最もはやく教科書に登場する詩は、李白の「静夜思」である。このような教育をうけた人々は、当然親元、郷里を離れて生活するとき、寂しさは満月によって刺激助長されるのである。こうした反復再学習が重なったからこそ、月すなわち望郷という感情が古代より来たりて、現在に至る迄、中国人の心の中で綿々として消えることがないのだと思う。

なお、本文では日本の月に対する感情は、中国のそれと似ていると指摘したが、すべての面で同一であるとは言えないこと勿論である。月に対する信仰、月の歌の表現などの異同について、今後の課題にしたいと思っている。

### 〔注〕

- (1) 楊柳續考——信仰から別離の象徴へ——『藝文研究』昭和六十三年、第五十三号。
- (2) 『説文解字』に、「望、月滿也」の注に「此與望各字、望從望省聲、今則望專行而望廢矣。」また「望」の注に「按、望、以望為聲、望、以望為義、其為二字較然也、而今多亂之。」とある。確かに本来違う字ではあるが、その語源は同一であると見て間違いない。
- (3) 白川靜著『詩經』、中公新書、昭和四五年。
- (4) 例えば『焦氏筆乘』云、「月出、見月懷人、能道中事。太白『送祝八』、若見天涯思故人、浣溪石上窺明月。子美『夢太白』、落月滿屋梁、猶疑見顏色。(中略)此類甚多、大抵出自『陳風』也。」
- (5) 「拜新月」という風習について、澤田瑞穂著「拜新月詞話」(『中国古典研究』二〇号、昭和五一年)「自然と文化」特集号「月と潮」、昭和六十年)に詳しい。それぞれの論文は、研文出版の『閑花零拾』(昭和六十一年)、中国の傳承と説話(昭和六十三年)に収録されている。
- (6) 『楚辭』の「涉江篇」に出ている。このの明月は月ではなく、明珠(珍珠)を意味する。
- (7) 『史記』「高祖本紀」、「高祖十二年十月、高祖已擊布軍會甄、布走令別將追之、高祖還歸過沛、留置酒沛宮云々」とある。

- (8) 鈴木虎雄譯解『玉臺新詠』(岩波書店、昭和二八年)と、大野実之助著『李太白詩歌全解』(早稲田大学出版部、昭和五五年)二書には、ともに言及されている。
- (9) 「賞月」の習慣はいつから始まったのが不明であるが、『晉書』、「文苑、袁宏傳」に「少孤貧、以運祖自業。謝尚時鎮牛渚、秋夜乘月、率爾與左右微服泛江。(下略)」とあるのを見ると、晉の時代にはすでにあったように思える。
- (10) 『月と不死』、N・ネフスキー著、岡正雄編、平凡社、東洋文庫一八五、昭和四六年。
- (11) 吉田隆英「唐宋拜月考」(日本中国學會報、第三十四集、昭和五七年)に詳しい。注(5)も合わせ参考されたい。

〔附記〕

本稿は一九八八年六月二五日の藝文学会研究発表会に於ける口頭発表を補訂したものである。